## 互いに支えあい、笑いあう
# あすなろ会ボランティア

**あすなろ会とそのボランティアの皆さん**
この日は、ひな祭りにちなんだイベントを楽しんでいました。

あすなろ会は、身体機能の維持・回復を目指す自主的なリハビリの会だ。簡単な体操やゲームで体を動かし、楽しく一日を過ごす。

そのあすなろ会には、常に数人のボランティアが参加し、体が自由に動かない参加者のために、道具の準備や片付けを行ったり、ともにおしゃべりを楽しんだりしている。

「ボランティアの皆さんは、私たちの太陽です」と、あすなろ会の皆さんは口をそろえていう。ふだん、外に出る機会が少ないあすなろ会の参加者にとって、会の活動は生きがいのひとつだ。「あすなろ会に行くと、家に帰ったあとも、今日は皆さんとこんなことをしたな、あんなことをしていただいたなと思い出して、また楽しい気持になるのです」そう語る参加者の明るい笑顔を支えているのが、ボランティアなのだ。

あすなろ会の活動内容は、会の参加者自身が決め、ボランティアは、「皆さんが出来ない部分をほんの少しお手伝いしているだけ」だという。ほんのわずかな手助けがあれば、あすなろ会の人たちには、できることがたくさんある。小さな手助けで、会の活動が続けられるなら、喜んで力を貸したいと、ボランティアの一人、高橋さんは言う。

だが、自分たちに、「ボランティア」という自覚があまりないという。「むしろ一緒に遊ばせていただいている仲間という感じです。あすなろ会では、笑いが絶えることがありません。あそこに行っては、心から笑って帰ってくる。昔の話で盛り上がったり、若い看護学校の実習生の皆さんが参加したり、家に閉じこもっていたら味わえないことばかりです」

あすなろ会も、ボランティアも、いつでも新しい参加者を募集しているという。新しい出会いに、常に意欲的なのだ。「ぜひ、お気軽にお出かけください」と、満面の笑顔でメッセージをくれた。

**あすなろ会の問合せ**
☎294－6878川崎さん

---

## 毛呂山歴史散歩
### 文化財シリーズ193
# 毛呂山町の大型板碑

板碑は、鎌倉時代から戦国時代にかけて盛んに造られた石造物です。亡くなった人の冥福を祈ったり、自分の死後の安楽を祈願するために立てられました。埼玉県、とくに長瀞町や小川町は、板碑を造る材料となる緑泥片岩の産地であることから、関東地方で確認されている板碑の秀作の多くは県内所在のものです。

毛呂山町にも数多くの板碑があり、また、最近では発掘調査によって出土する資料もあります。町内で代表的な板碑を紹介しましょう。

川角地区の『延慶の板碑』は、高さ264センチメートル、幅約80センチメートルの大きな板碑で、延慶3年（1310）に立てられたものです。かつては、現在地に程近い崇徳寺跡にありました。崇徳寺は中世に建てられた寺院といわれ、当時の権力の象徴でもあった、蔵骨器（骨を納める壷）が数個出土しています。これらの蔵骨器はいずれも県指定文化財となっています。高さでは延慶の板碑をしのぐ大型板碑が、葛貫地区にあります。

『嘉元の板碑』は、高さ3メートルを越す町内最大の板碑です。嘉元4年（1306）に立てられたもので、かつてこの地に宝福寺があったとの言い伝えもあります。

西大久保地区には町指定文化財の『弘安・応長の板碑』があります。ともに現状で2メートルを越すものですが、先端の山形部分がかけていますので、本来の高さは、延慶、嘉元のそれぞれの板碑と遜色の無い大きさだったと考えられます。弘安の板碑は弘安3年（1280）、応長の板碑は応長元年（1311）に立てられました。

町内の大型板碑は、いずれも1280年ごろから1310年ごろの年号が刻まれていますが、現在まで伝わる各地の板碑の優品は、鎌倉時代後期から末期に集中しています。

延慶の板碑

嘉元の板碑

弘安・応長の板碑